

真如堂再訪

塚田 實

今年四月、関西旅行の一連の行事を終えて東京に帰る日、半日時間があつたので真如堂一帯を散策することにした。

京都大学のキャンパスを歩いた後、吉田神社に参拝。「紅もゆる」歌碑を眺めて、宗忠神社の勾配の急な階段を下り、真如堂に向かった。

真如堂は正式には鈴聲山真正極楽寺（れいしょうざんしんじょうごくらくじ）といい、本堂を表す「真如堂」が通称として定着した。ここは紅葉の名所で秋は多くの観光客で賑わう。総門をくぐって本堂に向かつて緩やかな階段を上ると、周りに紅葉（もみじ）の新緑が鮮やかに展開する。秋と違って訪れる人は誰もいない。「紅葉も良いが、この新緑は見事だ」

いつもは本堂の前でお参りし、そのまま黒谷金戒光明寺に抜けるのだが、この日はまだ時間があつた。「お堂に入って阿弥陀如来様にお祈りしよう」。お参りした後、朱印帳を持参していなかったため、折角だから「書き置き」を頂こうと、本堂左手の受付に行くと、有料拝観の案内がある。「私の若い頃、真如堂にお参りしたときは、有料拝観の案内はありませんでしたが?」。以前草ぼうぼうだったお庭に、三十六年前造園家曾根三郎氏が『涅槃の庭』を作庭され、十四年前には重森三玲氏の孫、重森千青氏（ちひなせ）が『随縁の庭』を作られました。それからお庭を有料で公開するようになりました。ご覧になりますか?」。はい。お願いします」

最初に随縁の庭が現われ、三井家の家紋「四ツ目結（むすぶ）」が印象的に配置されている。三井家初代三井高利は真如堂を訪れたとき、自らの墓所をここと定め、以後三井家累代の墓所となっている。

涅槃の庭は釈迦入滅の様子を枯山水で表し、石組みとガンジス川を模した白砂は、借景の東山三十六峰と見事に調和している。

外に出ると新緑が目を射る。真如堂の裏から光明寺に向かう途中に「会津藩殉難者墓」がある。会津藩幕末の悲劇を思いつつ、しばし佇んでいると静寂の中で、ウグイスが何羽かホーホケキョと鳴いた。

光明寺からは京都の町が一望できる。爽り多い半日だった。